
アキ晴レ

仲江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アキ晴レ

【Nコード】

N 8 7 3 7 A

【作者名】

仲江

【あらすじ】

一人の女子高生は財布を捨てた。いつまでも変わらない毎日が、いつまでも変わらない。何かを変える事は、とても困難だ。それにぶつかっていく、プライドの高い女のお話。

財布 サイフ

今日、財布を捨てた。

8月31日。

汚い湿ったモップで、前身拭かれた気分を地獄のように味わい、梅雨を乗り越えた。そして、夏休み。

夏休みは毎日カラオケにボーリング、海に行き、旅行もした。

その他諸々、出来る遊びはやり尽くしたが、喜怒哀楽どの感情も生まれず、覚えている事といえば、旅行と生理が重なったくらいだ。合コンにも何度が付き合わされた。そこで会った男も女も、性欲を満たしたい、ただの馬鹿だった。

子孫を残す、という目的以外に性行為をするのは、人間以外いない。全く、くだらない。

課題は金を払ってクラスメートにやらせた。

これだけ遊び尽くしたが、金に困る事はなかった。

ない、と言えば、財布を内ポケットから慣れたこなしで取り出して、額を見ずに4〜5枚の札を机の上に置いて行く。

そりゃあ、モップで拭かれた娘の手など、触れたくないだろうよ。お蔭で4万はすぐに手に入った。

しかし、これからはもう要らない……要らないのだ。

そんな夏休みは今日で終わり、明日からは暑さの残る秋が始まる。今日はどこにも遊びに行かず、ただ、海沿いにある別荘に行った。その一室に籠り、私はひたすら考えた。

何を考えたかというと、財布の中身の処理方法だ。もちろん財布も捨てるつもりだが、まずはそれだ。

私の財布もブランド物で、ロゴが表面だけでなく内側の隅の隅迄写されている。

これを渡された時、持つのは私なのに、他人の名札を持つなど不可解だと思った。

色はピンク。“桃色”なんて可愛らしい呼び方はできない、ドキッ“ピンク色”。

その二つが、私がこの財布を初めて見た時の第一印象だ。それを床に投げ捨てたままベッドに寝転び、私は考えた。

中身は万札が11枚、五千円札が3枚、千円札が8枚、それと小銭が少し。飲食店やカラオケ、ボーリングなどのポイントカードや、割引券も入っていた。

どうしようか、破り捨てようか。本当はそれが一番良い。

今までもこれから、まるでそんな物など存在しなかったように、ぽつ、と消えてなくなってくれて良い。むしろ、それは困る。

私の手で処理したい。手応えのある方法で。

破って切り刻んで風にあげるか、海に捨てて腐るまで漂わせるか、燃やして灰を土に擦り込ませるか、どれにしよう。

使い物にならない姿にするか、それとも私の視界に入らない所にやるのが良い。

何だって良い。丸めて捨てれば良い事だ。こんな優柔不断な私も丸ごとなくなってしまう。

これは挑戦だ。金を失って、私は何ができるか。

学校へ通うための電車は、定期券を使えば乗れる。いや、自転車で登校しよう。いつもより30分早く起きれば問題ない。

今までコンビニやファーストフードで済ましていた昼食も、これからは自分で弁当を作ろう。

最低限、家にある物は使って良い事とする。

だいたい、冷蔵庫の中身だって、私の物だ。他の奴が家で飲食しているのを、見た事がない。ほとんど居ないのだから当然か。

使用人が私の材料を使って料理を作っているだけだ。これからは自分で作ると言えば、それで済む。

誰かの遊びの誘いにのつてもいけない。どうせ、誘いも馬鹿共が集まる合コンだ。問題ない。

ストレスが溜まるなら、叫べば良い。叫びながら走って走って、

頭に酸素を送らなければ良い。そうすれば、何も考えなくてすむ。

私は出来る。大丈夫だ。

辛い事はいつだって、自分一人で乗り越えて来た。今まで通りで良い。やっていける、やってやる。

ムラムラやる気が湧いてきた。こうなったら誰にも止めさせない。自分の頑固さは自分が一番良く分かっている。

勢い良く起き上がり、財布を拾いあげ、その勢いに乗って砂浜まで引っ張られるように飛び出した。

きつと、月の引力のせい。そりゃあ、大きな海まで引っ張ってしまっ引力だ。小さい私など、手軽いだろっよ。

月の引力を借りて、私はそのドキッピンクを中身ごと海へ投げ付けた。

どうせまた波にのって打ち上げて来るだろうよ。だが、またいくらだって捨ててやるよ。元々、私には何も無いのだから。

私には、自分しか居ない。

投げるのに勢いを付けすぎて、私は砂浜に足をとられた。ギリギリ手をついたが、顔に砂が付着したので私から砂浜に腹ばいになった。

格好悪い。脱力してしまうよ。結局さっきの勢いは月のお蔭かよ。情けない。

いくら夏の終わりだと言っても、まだ砂は熱い。しかし、夕方と海が冷まして調度良い温度になっている。

今回の挑戦に、不安はない。ゲームみたいな物だ。だって、ゲームというのは、わざとややこしく、困難に作られているものじゃないか。なのに何故、攻略本などという物があるのだ。矛盾だ。

世の中の細胞の一つ一つから全て、矛盾だらけだ。

なら、何故……何故……。

私は、こればかり。父はずっと、こればかり。

何故、彼は私と目を合わせようとしなのだろう。

何故、私達に使用人をつけたのだろう。

何故、私が遊んでいても何も言わないのだろう。

何故、たまに帰っている時、私とかち会うとピリピリ空気を変え
るのだろう。

何故、私が私立中学を嫌がった時に、溜息を吐いたのだろう。

何故……、母の葬式に來なかつたのだろう……。何故、それを今
だに氣に病んでいるの。愛してなどいなかつたくせに。

そんな彼にこう言いたい。

あなたはダレに、エンリョしているのデスカ。

彼は可哀相な人だ。愛してもいない人間と結婚し、愛してもいな
い人間との間に子どもをつくつた。

昔は可愛いかつただろうにね。いや、そうでもないか。私の頑固
さとプライドの高さは、生まれ付きだ。

可哀相な人。そして妻は死んで逝つた。

おまけに遺つた子どもも今では紅髪にピアス。右耳に2個、左耳
に3個。まあ、数なんて数えられる余裕などないだろうが。あと、
へそピアス。次は口に開けようか。

ピアスホールはへそ以外全て、安全ピンで開けた。その方が痛い
からだ。もちろん私はアブノーマルでもないし、ましてやマゾでも
ない。ただ膿むのだ。

炙らず消毒せず、尖つたピンで開けるとブチブチと皮が破れる音
がして、貫通したらその代わりに透明ピアスを差し込む。そのま
ま放つておくと、ジクジク膿んでくる。

そうなつた夜は絶対に彼の歸りを待つ。夜中になろうと待つて待
つて、たつたの3秒、彼の前に膿んだ穴をさらす。

私の小さな、1ミリのメッセージ。

あなたハ膿んでなど、イマセンヨ。

そうしてその夜は母の夢を見る。彼をまた一つ救つたのだから、
最高の夢だ。

呼吸をするたび、砂が口の中に入ってきてそうになる。それもあり
かな、と、苦笑いして、唇に付いた砂をグロスごと拭つた。

ゆっくりゆっくり出来るだけ時間をかけて起き上がった。潮がここに満ちて来るまで、本当は動きたくなかった。でも、そこを堪えて起き上がる、そんな中途半端な自分に腹が立つ。

そのまま無様に体を倒しているなんて、いくらでも出来た。ここには誰もいない。誰も見てなどいない。

しかし、自分が見ている。私の唯一の味方であり、仲間であり、家族であり、神である、自分が。

あんなに早く私達を置いて逝った事で母に裏切られ、それを見捨てた事で父に裏切られ、裏切る絆すら持てないクラスメート、使用人。

そんな触れ合う事のない人間関係中で、唯一裏切らないのは自分だ。唯一信じられるのは、自分だ。

こんな世界で今までやってこられたのは、自分がいたからだ。私は自分がいるから私でいられる。自分がいるから、生きていられる。だから、自分がいなかったら私ではなくなる。……つまり、そういう事だ。

特に体に命令した覚えはないが、私は立ち上がっていた。

海が、月に引っ張られている。なんて、中途半端なのだろう。

地球の重力に従ってここにいるのに、何故、月に引っ張られているのだ。

そんな海に腹立たしくなり、私は財布を海に捨てた選択は間違っていたなどいかなかったと思えた。

使用人 ショウニン

明日から、私の世話いらないから。

自分用の使用人にそう告げた。

「さようですか。承りました。」

使用人は、一瞬どうしても戸惑いを隠しきれなかったようで、そう答えるのに間ができた。

使用人に感情は要らない。

そう父が教え込んでいたので、彼女はそれに素直に従っている。彼女が純粹だからか、馬鹿だからか、金がかかっているための必死さか。多分、後の二つだろう。

しかし彼女が忠実なおかげで、私はかなり助かっていた。深く首を突っ込んでこない人間とは、なんて、都合が良いのだろう。

ただ彼女は私に食事を作り、家に様々な薄汚い人間を連れ込んで来た時には、ドリンクを出す。洗濯をし、掃除をする。

つまり、仕事なのだ。OLがひたすらキーボードを打つように、

大工が釘を打つように、それは仕事でしかない。

会話といえば、

「お早うございます。」

「いつてらっしゃいませ。」

「お帰りなさいませ。」

「お休みなさいませ。」

「お食事の時間でございます。」

「失礼します。」

「承りました。」

「承りました。」

「承りました。」

……。

例えば、私の部屋から麻薬が出てきたとしても、彼女は警察に知

らせる事もなく私の部屋の窓を拭くし、例えば、私が部屋を一步出た所に不発弾が埋まっていると知っていても、彼女は

「お早うございます。」
と言う。

彼女は仕事の区域から抜けたりしない。決して、私の事に口出さない。

私はソファアールの上で姿勢を崩して、彼女が心配しているであろう事を言った。

「世話はどう良い、というだけで、クビじゃないから安心しなよ。自分の事は自分でやる。当たり前な事だろう？放つたらかしにしながら、私にそれをさせようとしな。あんたの雇い主は変わり者だ。」

彼女はそんな私を変わり者という目で見た。

彼女は気持ちを出さないように努力しているつもりだろうが、昔から彼女の考えている事など、透けて見える。

何故かな。綺麗な心を見透かすためには、何度もファイアウオールを抜けなければ出来ないのに、薄汚い心はいくらだってたやすい。そんな事をぼんやり思いながら続けた。

「あんたの雇い主には、この変化を告げない。もちろん、数人のあんたの同僚にもね。あんたは今まで通り、仕事場に来れば良い。ただ、仕事はないけれど。私を世話する労働基準法の時間、下のロビ―でテレビを見ても良いし、書庫で小説を読んでいても良い。別にここに来ないでそのままどこかに出掛けたって良いかもね。あ、その時はその趣味の悪い服、着て行かないでよね。」

私はそう言って、彼女が着ているメイド服を指差した。

メイド服は、動きやすく汚れても良いような、スウェットだ。

「でも、ちゃんと、今まで通り給料は出さ。文句ないだろう？」

私は彼女の自由を表現するように、両手を大袈裟に広げた。

交渉成立。彼女がこんな都合の良い話、断るわけがない。

「……さようですね。」

笑える。世の中、どこかとてもなく難しい代わりに、どこかとはとてもなく安易だ。

「しかし、それでは申し訳が立ちません。」

彼女が初めて自分の言葉を発した。

「何が。私が良いって言っているんだ。他になんの問題があるわけ？」

彼女は、小さく、ゆっくりと深呼吸した。

「確かに、わたくしは雇い主様に、貴女様のご注意を良く聞くようにと命じられております。」

私は目をつぶり、彼女の初めての言葉を堪能した。

「しかし、こればかりは申し訳ないのです。」

彼女は一瞬、気恥ずかしそうに言葉を止めた。その表情を隠そうという様子は見られなかった。

「わたくしの……仲間に、申し訳が立たないのです。」

何だ、この女。

私の許しを得る前に続ける。

「このご住まいの使用人、わたくしを除き4名……、4名共、わたくしの仕事仲間でございます。」

「仲間……。」

私は彼女を見ずに、単語だけ呟いた。彼女には聞こえていないだろう。

「これからも仕事仲間は真面目に仕事をこなしていくというのに、わたくしだけ怠惰をしてお給料を頂くなど、仲間に失礼ですわ。」

「じゃあ、クビだ。」

私は冷淡にそう言うと、部屋を出るためにソファから体を起こした。

「承りました……。」

彼女は90度、頭を下げた。

馬鹿だ、この女。仲間に悪いと思って、こんなうまい話断って。

それに、私を怒らせたなら切られるのは分かりきっている事ではない

か。それほどまでに大切な仲間なら、一緒に仕事をしたいと思うものではないのか？ 気に入らない話でも、受け入れるべきだったのだ。ああ、そうか。彼女はここを辞めるきっかけが欲しかったのだ。彼女は馬鹿だ。しかし案外、不発弾があれば知らせてくれたかもしれない。

私は部屋を出て、水を飲むために台所に立った。

ザー、と、必要以上に勢い良く水を出す。それをコップに入れず、そのまま唇を付けて飲んだ。

水を止めても、ザー、という音は、消えない。

.....。

.....うるさい.....。うるさいうるさい！

何故消えない！ 水の音が消えない。

そうか、私が甘かったのか。最低限冷蔵庫内の物は使って良いとしたから？分かったよ...これなら文句ないだろう！

私は冷蔵庫の中身を全て捨てた。

先ずは一番上の、扉式。パッケージに入っている物はそれごと捨てた。その内ごみ箱に入りきらなくなると、洗面台に流し込んだ。

流れない物は窓から外へ。引き出し式の一段二段、冷凍庫、野菜室。全てが空になった。

最後に這って冷蔵庫のコードを探して抜いた。

.....。

満足かよ。これで良いのだろう。

水の音が、少し遠退いた。

元樹 モトギ

今日から学校だ。

9月1日、5時03分。

私は時計を見た。私の才能。それは好きな時間にももちろん目覚ましなしで正確に起きられる事。

昨日の夜、私は5時03分5時03分……、と78回唱えて眠りについた。簡単な暗示だ。

意外だろうが、私は三食きちんと食べる人間だ。

それは、使用人が欠かさず私の食事を作っていたからではない。私の性格をそろそろ理解している人は、そんな事、私がもし三食きちんと食べない人間だったなら、全く関係ない。という事に気付いてくれているだろう。

今日の朝食は、トーストに半熟のスクランブルエッグ、ウィンナー。それと、冷たいアップルティー。の筈だったが、悔しい事に材料がない。残念ながらバイトを見付けなければならぬらしい。屈辱的だ。しかし、これ以上の屈辱を避けるため、それが良策なのだ。私は、いつも通り着替え、顔を洗い、化粧をした。

いつもと違うのは、日の出を見た事と、朝食抜きという事だ。この分だと。今日は一日中メシにありつけそうにない。

鞆は玄関に置いて、ローファーで庭に出た。木々に包まれた使用人の寮の方向に進む。

使用人の寮は、いつも静かに目を覚ます。多分、今頃布団から健やかに起きて、緻密な機械のように皆揃って布団を畳んでいる。そして、私専用の使用人は荷造りしている事だろう。

6時00分。

そこを通り過ぎて、さらに奥へと進んだ先には、寮を包む木々の葉を被った、倉庫がある。

久々にここまで来た。幼い頃はよくあいつと遊んでいたものだが。

昔はもつと、温かく、大きく見えた。

クタクタになった倉庫の鍵を開けて、扉に手をかけたが、案の定開かない。

あいつに会っていない期間より、長く、誰からも忘れ去られ、父も使用人にここを管理するよう、指示するのを忘れていたくらいだ。使用人もこの存在に気付いていれば、仕事を増やすために、言い方を変えれば給料を増やすために、尋ねただろうが、誰も気付いた様子はない。

それ程、ほとんど息をしない状態で眠っていたのだ。

この倉庫にとってこの扉は傷口だったらしい。

昔、私達はこのいつの傷口をパカパカ開けまくっていたのが、長い時を経て、完治したのだ。

そんな倉庫には済まないが、私はあんたの傷口を再びえぐり出す事になっても、成し遂げなければならぬ事がある。

倉庫に足をかけ、思いきり扉を引っ張った。ギシギシと倉庫の悲鳴が聞こえたが、一切、容赦はしない。ガリツと乾いた音がして、やっと5センチ程、傷口が開いた。後はちよろい。さらに力を込めて、引っ張る。ガリツザリザリ。砂が棧に詰まっていたような音を上げた。悪いな、倉庫。

何年振りかの倉庫内は、埃にまみれて湿っぽい悲しげな感じを漂わせている。

そこに、あいつの残像は見なかった。

中に一步踏み込むと、埃は嬉しそうに、自分が死んだと気付いていない幽霊のように舞う。

もう一、二歩進む。ローファアの跡がうつすらと付く。

私は同じ埃を被った、目的の物を見つけた。あいつが置いて行つた、紅い自転車。

男なのに、何故紅なのか。それは単にあいつの趣味の悪さからきていると思う。

埃をここで掃うと、とんでもない事なるのは容易に想像出来たの

で、とりあえず外に出した。まあ、動かすだけで大分な埃が舞うわけだが。

自転車が外に触れた所から、明るく照らされる。

どうだ？何年振りかの外は。気分最悪だろう、ざまあみる。お前だけこの腐った世界から隔離された所で化石になれると思うなよ。道連れだ。

私は自転車に向かって、優位な口許だけの笑顔を作り、埃を掃ってやった。

「何、あなた自転車通学？」

漆黒の美しく長い髪をした元樹が、残暑にうんざりした顔で尋ねてきた。

「まあね。」

そう私は答え、慣れない駐輪場に、寝起きで無理矢理運動をさせられて不機嫌な自転車を停める。

「馬鹿でしょう。あなた自転車で何時間かかるのよ。」

「1時間強。」

「どうせ、強の部分が59分なのでしょう？」

電車通学の元樹はあっさり正解を当て、溜息を吐いた。

私は彼女の溜息が数少ない好きな物の一つだった。

彼女、元樹結子は私のクラスメートだ。

私の事を友人やら下手すれば親友なんてほざく輩よりかはよっぽど私の存在や考えを理解している。

彼女はそんなつもりはないのだろうが、私の考えを呟くと、ああ、そうね。あなたはそう思っていると思っていたわ。などと真顔で頷く。

それほどの理解者でありながら、いや、だからだろうか。私達はクラスメートだった。

元樹は私の考えを感覚的に受け止める、天才肌だ。それは、彼女に靈感という物があるせいでもある。と、私は思っている。

時たま私は彼女の愚痴を聞く。

虐待されて死んだ餓鬼の夜泣きで眠れなかった。とか、動物霊が通学途中に複数ころころとついて来た。とか、溺死した女に冷たい掌で顔を撫でられた。とかだ。

そのたび私は、そんな漆黒の髪に闇色の瞳をしているからだろうと、冷酷に答えるのだ。

今日も彼女の愚痴を聞きながら、汚い欲情の溜まった教室へと向かった。

扉を開けると、人間が密集したために溜まった熱気が押し寄せて来る。冬になると、皆寒がつて換気をさぼるので、その濃度が上がる。

そのため、私は冬が嫌いになった。あの熱気は間違いなく欲情の塊だ。それが気持ち悪く、嫌いで仕様がなない。

「何、あなた自転車通学？」

漆黒の美しく長い髪をした元樹が、残暑にうんざりした顔で尋ねてきた。

「まあね。」

そう私は答え、慣れない駐輪場に、寝起きで無理矢理運動をさせられて不機嫌な自転車を停める。

「馬鹿でしょう。あなた自転車で何時間かかるのよ。」

「1時間強。」

「どうせ、強の部分が59分なのでしょ？」

電車通学の元樹はあっさり正解を当て、溜息を吐く。

私は彼女の溜息が数少ない好きな物の一つだった。

彼女、元樹結子は私のクラスメートだ。

私の事を友人やら下手すれば親友なんてほざく輩よりかはよっぽど私の存在や考えを理解している。

彼女はそんなつもりはないのだろうが、私の考えを呟くと、ああ、そうね。あなたはそう思っていると思っていたわ。などと真顔で頷く。

それほどの理解者でありながら、いや、だからだろうか。私達はクラスメートだった。元樹は私の考えを感覚的に受け止める、天才肌だ。

それは、彼女に靈感という物があるせいでもある。と、私は思っている。

時たま私は彼女の愚痴を聞く。

虐待されて死んだ餓鬼の夜泣きで眠れなかった。とか、動物霊が通学途中に複数ところとついで来た。とか、溺死した女に冷たい掌で顔を撫でられた。とかだ。

そのたび私は、そんな漆黒の髪に闇色の瞳をしているからだろう。と、冷酷に答えるのだ。

今日も彼女の愚痴を聞きながら、汚い欲情の溜まった教室へと向かった。

扉を開けると、人間が密集したために溜まった熱気が押し寄せて来る。冬になると、皆寒がつて換気をさぼるので、その濃度が上がる。

そのため、私は冬が嫌いになった。あの熱気は間違いなく欲情の塊だ。それが気持ち悪く、嫌いで仕様がなない。

「おはよう！」

“親友”がキンキン声で近付いて来た。

元樹は教室に入ると私と話すのを止め、距離をおく。おそらく、私に近付いてくるうるさい輩に自分も巻き込まれないようにするためだ。全く、ずる賢い。

面倒臭く、無視する私に、小動物はキャンキャン騒ぐ。

「いつつもいつてるじゃあん！あいさつくらいはしてよう！」

「あー……。」

気のない返事をする、なにそれっ！とまた私の周りをチヨロチヨロする。鬱陶しい限りだ。

そして、思い出したように話しを続けた。

「あ、ねえねえ、ごうコンあるよう！いかない!？」

「行かない。」

「やだあ！あいてのみんな、このあいだのビジンつれてきたらくる、つてヒトばっかなんだよう！オトコは力オでばっかえらぶからあ！」
そう言うハムスターのように頬をプックリ膨らませる。

「ふーん。」

「ねえ、いこうよう！」

何故こいつは私がどのように冷たくあしらってもめげないのだ。

「ナツヤスミはいっぱい、あそんでくれたじゃあん！」

「悪いけど、」

私はピシヤリと言った。

「気もないし金もない。」

「ウソだあ！おじようサマが、なにいつてるのあ？」

その一言で、一瞬、世界がモノクロに変わった。

「誰がだよ。黙ってる！！」

私が大声をあげ、小動物の胸ぐらを掴むと、教室の欲情だらけの空気がヒヤリと変わった。教室中の目が見開かれ、私に注がれる。

ただ、元樹だけは表情を変えず、相変わらずの闇色の瞳をしていた。

「……どうしたの……？おじようサマなんて、いつつもいつてるじゃあん……。」

小動物は完璧に尻尾を下げて、震えた声で尋ねた。

それはきつと、あいつの自転車に乗って来たからだ……。

私は教室を出た。

「どうして学校という物は、こんなに“いる”のかしら。」

「そんな漆黒の髪に闇色の瞳をしているからだろう。」

屋上に来るなり、元樹は愚痴をこぼした。私と少し離れた所で金網に手をかけ、もう夏が終わった事を知らない太陽の下で、こう言った。

「今日は、暑い中をいきなり自転車で来たり、普段なら小動物を上手くあしらうのに襲ったり、どうしたのかしら。まあ、私は興味ないけれど。」

彼女は本当に興味がないようで、細く白い指で髪をかきあげる。

彼女は肌が白い。いくら白いと言われている人も、ベースは肌色で、例えば絵にして色彩をつけるとしたら少なからず肌色を混ぜるだろうが、元樹は違う。全くの、白なのだ。

その白が髪と瞳の間でまた映える。

そんな、最高に夏の似合わない元樹の近くで、私は呟く。

「私は、宇宙人なのかもしれない。」

「あら、そう。宇宙人を見るのは初めてね。」

ほとんど独り言のように私は静かに続ける。

「私は、この者ではないのだと思う。そう、感じる。何に対してもピタリとこない。きっと、宇宙になら、そのピタリとくるものがある。」

そう、きつと宇宙なら……。

彼女は前を向き、

「ああ、そうね。あなたはそう思っていると思っていたわ。」

そう、静かに頷いた。私は、ただ、見えない月を見ていた。

紅 ア力

通学途中にあるコンビニで、バイトを始めた。

何故コンビニかと言うと、賞味期限が過ぎた商品を貰えたり、商品に手を出しても誤魔化せる。と、元樹の兄が言っていたらしい。

それなら、給料日まで待たなくとも、食事にありつける。

そうして、私はすぐにコンビニに電話をし、するとその日にすぐ面接、採用となり、次の日には食事にありつけた。

月初めに入った私は、少ないながらも給料日の15日に給料を受け取り、そして明日また、受け取る日になる。

もう秋も、半分を過ぎようとしていた。気が付けば気温心地良く、葉の色も紅に変わり始めている。

今日は、土曜日だ。しかし、習慣とは恐ろしいもので、平日と変わらず5時03分に目が覚めた。

「お早うございます。」

「……。」

まだ起ききつていない頭を支えながら部屋を出る。

使用人達は、私が5時03分に起きるようになったと知ると、今まで6時00分に起きていたのを早めた。私が目を覚ます頃には仕事スタイルだ。夏休み明けはこうではなかった。

廊下にモップをかけている手を止め、頭を美しく下げる。それに返事をしないのはいつもの事だ。

台所に向かい、バイト先で貰ってきた弁当を朝飯に食べる。

空になった箸の冷蔵庫は次の日の夕方には元通りになっていた。

次こんな事をしたらクビにするぞ。と忠告し、今ではコンビニの廃棄が並んでいる。

それに少ない給料で買った、アップルティーを煎れた。

食事を済ませ、カップを洗い、自室で物憂げにしていると突然、電話が鳴った。数少ない電話も携帯電話を使っていたので珍しい。

この電話は使用人からしか繋がってこない。

外線電話はまず、使用人の寮にある電話に繋がり、使用人がとる。そこで誰に何の用があるのかを聞き、ようやく私達に繋がるのだ。

『田中様からお電話です。』

田中……。聞いた事がないが、夏休み中に顔を合わせたといつかだろう。

「面倒臭い。」

そう言ってブツリと切った。しかし、数分後、『田中様からお電話です。』

「……繋いで。」

不機嫌にそう言うと、いつも通り単調に使用人は、承りました。と応え、田中に繋いだ。

『もつしもーし。田中さん。』

聞き覚えのある声。この妙に空元気な声を聞くのは何年振りだろう。まあ、良い。考えるの、面倒臭い。また電話を切る。しかし、『田中様からお電話です。』

『何で切るんだよー。相変わらず、冷たいなあ。』

「お蔭様で。」

『え、俺のせいなの？ やった。ていうか、もつと突っ込み所あるだろう。』

馬鹿だ。付き合っていないよ、全く。

『……ほら、お前、田中じゃないだろう？』男は情けない声で呟く。「相手の姿を目の当たりにしないでぶん殴る方法、ないだろうか。」

『そんなに俺に会いたくないんだ。でも、殴るんじゃないかって突っ込めよ！』

「ちよつと黙れ。」

『……はい。』

男は素直に従う。情けなさ過ぎて溜息が出る。

なんだってこの男が、

「今まで何処で腐れてた。このクソ兄貴。」

私の兄貴だつていうのだ。

『うわーっお前、髪真つ紅じゃん。恐ー。』

「見てるなら今すぐここに来い。」

『はい。』

カラツとした太陽みたいな声を發して、カーテンの隙間から豆粒大の手を振る。

「死ね。」

その豆粒を潰すように、カーテンを思いきり引つ張つて、私はあのクソ野郎が来るのを待つてやった。

「おじやましまあす。なあ、外に停めてある自転車、俺のだろう。懐かしいなあ。何、お前使つてんの？」

彼は入つて来るなり人より1・5倍は大声で、早口にそう言った。

「だったら、何だ。」

「別に。奈美ちゃん、アップルティー。」

久々に見る彼はダボダボしたジーパンにタンクトップ、その上には紅の半袖で薄生地のプロックチェックシャツを羽織っていた。髪は、私が最後に見た時より短くなっており、ワックスで前髪を上げている。

「奈美なら辞めた。」

「へえ、何でだよ。」

「何で、お前に教える義務があるつてんだ。」

「お前が追い出したつてか。酷い子っ！」

むかつく事に、彼は鋭い。

「じゃあ、明理さんに会つて来よう。」

「……。」

「部屋は変わつてないよなあ？」

そう言いながらズカズカと迷いなく一部屋へ向かう。

私は彼が明理に挨拶しているのを、入口で黙つて見ていた。

「ふうん。ちゃんと綺麗にしてあるんだな。」

私は久々に部屋の中を見た。どれ程久しぶりかという、彼が家を

出て行ってから、一度も来ていない。

「それじゃあな。またいつか来るよ。」

彼は明理に挨拶を終えて、部屋を後にした。

「お前、レベルあがったなあ。」

こいつはポンポンと話を変える。昔からそうだ。そんなにも人に聞いて欲しい事があるのか。

「何か、昔から格好ハードだったけど、髪には兄ちゃん驚いたよ。」

そう言つて、私の髪を撫でる。むかつく。

「うるせえ、触るな。」

「はいはい、すみません。他のメイドもいないの？ああ、調度、昼休みか。まあ良いや、アキラが煎れてよ。」

「は？私かよ。」

「うん。」

「ぶっかけるぞ。」

もちろん、お湯を。

「……仕方がないなあ。俺が煎れてやるよ。お前もアップルティーで良い？」

「アップルティーしか飲まない。」

彼は台所へ向かい、紅茶パックはどこかな……などと独り言を呟いている。

兄貴。

この世に裏切られっぱなしの私、の兄貴。

私を裏切ったそのまた一人の兄貴。

私達の昔を知っている奴等は言う。太陽の兄、月の妹。

しかし、そう言えるのは本当の兄貴を知らない奴等だ。どちらにしても、私達兄妹は使用人内のブラックリストだが。

兄貴も使用人を辞めさせた前科あり。私より質の悪い辞めさせ方。殴ったのだ。

「ということ、あと使用人の寮に何人残っている？」

「4人。」

使用人の寮、と呼びだしたのは彼だ。なんとなく気に入って、私もそう呼んでいる。あと、どうでも良いが、彼は使用人の寮以外、使用人の事をメイドと呼ぶ。

「この世の中、根性ある奴が4人か。上出来。」

彼は棚という棚を開けて紅茶パックを探している。もちろん、教えてやる気はさらさらない。

「何年振りかな、こうやってアキラと話すのは。」

なかなか見付けられない彼が、また呟く。

黙っていても紅茶が出てきていた彼にとって、それを見つけ出すのはかなり困難な事らしい。少なくとも、この台所だからだろうが。

「もう3年かあ。」

「10年だ。」

「何の数字？」

「お前が使用人殴ってから現在まで。」

「ああ。」

彼はまるでそれを、隣に住んでいるおっさんの苗字が、田中だよ。

と聞いて、ああ、そう言えば。というように言った。

「アキラ、それ覚えているんだ。」

「まあね、」

当たり前だろう。

太陽の兄と呼ばれていた、いつでも空元気な兄貴。

その兄貴が修羅と化した、あのモノクロ場面、表情。それを見ていない者が、太陽の兄貴、などと呼べるのだ。

悔しいが、こんな死ねなど言っている私が、幼少期のあの日を思い出すだけで、彼に隠れて身震いする。

6歳離れた兄貴。

私の兄貴。

昔、唯一私を裏切らないのは自分ではなく、兄貴だった。なのに、彼は母親以上の裏切りを私に、した。

幼い私は気付かなかったが、10年前には彼も幼かった。

母親が死んで、彼の心中は悲しく、切なく、やるせなかったかもしれない。もしくは、そうではなかったか。

何はともあれ、彼は使用人を殴った。いや、殴ったは正しい表現ではない。あれは、殺人未遂、だった。

モノクロの中で唯一認識出来る色は紅だった。彼の名前の一文字でもある、紅。

彼女は奈美以上に良く出来た使用人だった。

幼かった私達を粗末に扱うような女ではもちろんないし、父親の教えを越えて、母親を失った私達に同情するような奴でもない。(そのような女なら殴られても仕様がなと思う。というか、私が力がないなりに限界を超えた力で殴っただろう。)

だから、だったのか。しかし、だったのか。彼女は殴られた。

いつも通り、私達にりんごジュースを運び、

「お待たせ致しました。」

と言い、彼もいつも通りに

「ありがとう。」

と言った。なのにその直後、彼は彼女に襲いかかった。

その瞬間のあの兄貴は、とても13の少年が作れる表情ではなかった。

苦難な道を何度も通り、しかしその度、先に光など見えず、もがき苦しむと同時にこの世界を憎んでいる。

そんな人生を歩んで憎悪が熟年した56歳の男がようやく出来る。

無表情の奥に深くドロドロとした闇があった。

何度も何度も彼は年上の成人女性を殴りつける。

今思うに、顔を殴って形を変え、母親の顔にしようとしたのかもしない。

まあ、兄貴でない私は彼の心中を想像するしか手がないし、彼もまた、何故あんな事をしたか分かっていないと思う。彼にとっては、田中さん、なのだ。

彼女の顔から、彼の拳から、鮮血が飛び散る。

幼い私はそれを、りんごジュースの入ったコップを持ち上げた所から、動けず見ていた。見ながらその紅を、綺麗だな、とぼんやり感じていた。

それ以来私の好きな色は紅になった。

その事を6年後、彼に伝えたと、さらに1年後、彼はこの家から姿を消した。

その事を考えれば彼にとって田中さんは重大だったかもしれない。それが、彼のした裏切り。

たった一人、兄貴を信じていたのに、彼は私を置いて行った。修羅の思い出を残して。

「アップルティーだぜ。」

りんごの形をしたコースターにカップを乗せ、私の前のソファアに座った。

彼の遊び心だろう。馬鹿だ。しかし一体、どこにこんな趣味の悪い物があつたのだ。

俺、この椅子嫌いだ。

彼は不満気にソファアに体重をかけた。

「何か落ち着かない。椅子だけじゃない。このカップも、ガラスも、床も、全て。」

言葉を続ける彼を見ず、私は熱いアップルティーを口に含んだ。

「当たり前だよな。赤の他人が生活感まで全て拭き取っちゃうんだから。俺達が付けた泥の手形を拭き取られた時は、本気でむかついた。その時はそいつの布団、燃やしてやったけど。」

ああ、あの使用人の寮の小火騒ぎ、あんたの仕業だったわけだ。まあ、なんとなく知ってはいたが。

小火に使用人共がギヤーギヤー言っているのを、私達は手を繋ぎ静かに見ていた。幼い彼が私に向かって無邪気にウィンクする。

「俺達が汚いって言いたいのか。お前等の方が汚いんだよ。そんな手でベタベタ触ってんじゃねえ！」

彼はカップを投げ付けた。それがガラスにぶつかり、二つが割れる。その音に驚いた、庭の木に泊まっていた鳥達がバサバサと飛び交って行く。私はその羽の音を今度は後ろ耳で聞いていた。

ゆっくりと目を閉じると、美しい彼女の紅が瞼の裏を染める。

「最近、どうだ。」

パツと表情を笑顔に変えて私に尋ねた。

「どうだ、って何が聞きたいんだよ。」

「何でも良いよ」

「何もねえよ。」

何だよ、つつまんねえ。彼は舌に火傷をしたように言った。

「お前は何してた。どこで腐ってやがったんだ。」

「腐ってないよ。」

またあの、ああ、田中さんね。と言う時の顔で応える。

「カメラしていた。」

「ふうん。」

冷てえ。とぶつくさ言いながら、彼は勝手に語り出した。

母親が死んで何日目かの夜、何となく胸が気持ちの悪い感情に包まれたら、兄貴の部屋に行った。

そんな女々しい私に気付くと、彼は見ていた写真集を、そつと閉じ、おいで、と手招きをする。

「カメラしていた。とりあえずインスタントカメラで撮っていた。あと、展示会にも金貯めて行ける限り行った。それで、見つけたんだ。何かこう、ガツとくるもの。運が良い事にそれ撮った奴が来ててさ。気が付いたら、弟子にして下さい。ってその人の胸ぐら掴んでた。」

その時からプライドの高い私は、ベッドではなく床に寝そべる。そんな私に柔らかく微笑み、兄貴は語り出す。

声変わりをしかけていた彼はガラガラ之声をされていて、私の気持ちの悪い感情は、またこつそりと水を吸う。

写真集を握りながら語る、あの頃の兄貴。その思い出だけは色鮮

やかだった。

「それから、金も貯まってカメラも買った。」

私はただ、アップルティーを飲んだ。

「やっぱりさ、自分よりも上手い写真撮る奴がいるとむかついていた。でも、そんな無意味な感情も全てなくなって、自分の撮りたい写真が撮れるようになったら、まずこれを撮ろうって決めてたものがあるんだ。」

そう言う彼の目線に、私は気付かない振りをする。

「でも、そっちの方はまだ何か見つかってないみたいだから、それから撮る事にする。」

私は、ただ、アップルティーを、飲んだ。

「……あのさ、もしもね。」

また話が変わった。そして、間。彼が言うのを躊躇っている。

鳥のいなくなった庭はしんとしていた。

「あの時、お前も来るか、って言ったら、俺に連いて来た？」

……。

あの時、とはもちろん彼が家を出て行った時の事だろう。

「あの時、お前にも、もちろん親父にも何も言わずに出ていくつもりだった。でも、あの玄関からすぐにある、階段上がった所が前の部屋っていうのが悪かったんだな。明け方こっそり出て行こうとした時に、お前が部屋から出て来た。それでその時はいつもの無表情で良く分からなかったけどよ、今思えば、何だよ出て行くのかよ、私を置いて。って目で見てたよな、お前。」

「見てねえよ。」

私は嘘を吐いた。

「ふうん、じゃあ、答えはノーか。」

「当たり前だろ。」

私がそう言つと、彼はもう一度、ふうん、と言った。

「じゃあ、そろそろ行くな。」

彼は嫌いなソファーから腰をあげた。

「このコースター、貰って行く。」

趣味悪い。私が呟くと彼は、3年前に二階から見た笑顔を作った。少し悲し気な、でも無限に優しい少年の笑顔。

彼の本当の姿は、殴った修羅か、この笑顔、どっちだ。

今度は同じ高さの床に立って彼を見送る。

「じゃあな、また来るよ。」

「二度と来るな。」

中指立てた私に彼が笑う。

「じゃあ、今度はお前が来い。」

私の指を優しく覆い、兄貴はまた、出て行った。

私の兄貴。

この世に裏切られっぱなしの私、の兄貴。

だが彼も、私と同じに裏切られているのだ。

『あの時、お前も来るか、って言ったら、俺に連いて来た?』

…… 答えは、イエスだ。

幼かった私は、同じ傷を持った兄貴がこの世の救いだった。しかし、聞くのが遅すぎるんだよ。クソ兄貴。

答えは、ノー、だ。

抱イタク

今日は少し、肌寒い。

気付いてはいたのだ。

上着を一枚羽織り、紅い自転車でバイト先へと向かう。

休日なので、7時から休憩を含み、17時までである。店長が話の分かる人で助かった。

日が沈むのが早い。もう、薄暗くなり初めて、皆戸惑っている。気付いてはいたのだ。

それを私は、疲れた瞳にひっそりと映した。

そのバイト先で、知り合いに会った。自動ドアが開く。

彼女だ。

私に見せた事のない表情をしていて、その横には男。二人は心地良い風と共に颯爽と登場した。

目が当然のように合う。バチツと彼女の中に何かが巡り、レジと不似合いな私に気付くと、笑顔が驚きに変わる。

「よう。」

「……お久しぶりでございます。」

私が声をかけると、彼女は落ち着きを静かに取り戻し、慣れた敬語を使った。

隣の男が、知り合い？と小声で尋ねる。それに頷き、私に軽く一礼をすると、何事もなかったかのように店内をウロウロとし始めた。何故、声をかけたのだろう。いつもの私なら、相手から声をかけられても無視するのに、反射的にかけてしまった。

二人は仲良さそうに商品を選んでいる。なるほど恋人がいたからか。だから、あの時……。

少しあの時の事を思い出しかけていたら、すぐにレジに来た。コーヒーを二缶とアップルティー。どちらもホットだ。そうか、今日は寒かった。

「335円になります。」

彼女に初めて敬語を使う。

レジを終えると、二人は出て行った。が、何故かまだ入口付近で話をしている。表情から、何を話しているかは読み取れない。

すると、男と別れて、彼女だけがさっき買った物を持ったまま、小走りで戻ってきた。今度は真っ直ぐレジに来る。また、一礼。

「今日は、アキラ様。」

髪が、少し伸びた。キャラメルブラウンにショートが清楚だ。ワンピースに軽くカーデイガンを羽織っている。

仕事着しか見た事のない私には、彼女の私服は新鮮だ。

「お仕事はいつ頃にキリがきますでしょうか。」

「さあね。」

「お話しいたしましょう。」

「何を。」

「世間話を。」

「何で。」

「お話ししたいのです。」

「何時に終わるか分からない。」

「終わるまでお待ちしております。」

「帰れ。」

『承りました。』彼女ならこう言う、筈だった。

「お断りいたします。」

さっきの爽やかな風が、ピシ、とした空気に変わる。彼女は前と変わらず年下の私に敬語だが、口調には前と違う、自分の意思を感じる。

「わたくしはもう、アキラ様の使用人ではないのですから、命ぜられた事を守る必要はないですよね。」

そう、彼女は最高の笑顔でハッキリと言った。そして、また一礼し、機嫌の良さそうに店を出る。

どうやら、裏にあるスタッフルームの出口に向かったらしい。態

度は変わつたくせに、相変わらず考えている事はバレバレだ。

「今の人、誰。」

同じバイト先の元樹の兄が話しかけてきた。（まあ、彼も元樹なわけだが。）

彼は、あのクソ兄貴の友人でもある。容姿は元樹をそのまま男にしたようで、美しい。しかし靈感は全くない。兄貴と関わっているくせに、性格はかなりの大人で、気の利くなんと完璧な人だ。おかしな所といえば、女口調な事だけ。

「可愛い人ね。」

誤解を生むといけないので言っておくが、ホモではない。ただ、個性的なだけだ。苗字が元樹なのでしようがない。

「あの人は……」

「お姉さん？」

「……。」

「あら、でもいなかったわよね。」

どうやら彼は私達の会話は聞いていなかったらしい。家族に敬語は、おかしいだろう。

「まあ、良いわ。アキラちゃん、もうあがる時間ね。お疲れ様。」

……参ったな。

「お疲れ様です。」

彼女は何故こんなにも機嫌が良いのだ。

「どうぞ、召し上がって下さい。」

さっき買ったアップルティーを差し出してきたので、私は黙って温かい缶コーヒーを彼女の横に置いた。

「……。」

私の意外な行動に、どう受け応えようか困っている。

「どうせ、それはもう冷めているだろう？」

彼女がアップルティーと一緒に買った、開けられていない缶を指差して言った。

もう冬に近い今は、カーディガンだけでは寒いだろう。

「ありがとうございます。」

……成る程。この笑顔にあの恋人はやられたわけか。

さらに、彼女の機嫌は良くなる。

このコーヒーが、元樹の兄が私にくれて、ただ私がアップルティーしか飲まない主義のため、調度良く彼女にやる事になったのは、黙っておく。

「お元気でしたでしょうか。」

「あんたが現れるまでね。」

私が憎まれ口をたたくと、ふふ、と湯気の中でまた笑う。

そして、彼女はコーヒーを、私は微温いアップルティーを飲み、静かな空気が流れる。

これが、彼女か。この雰囲気は嫌いじゃない。

「あんたが辞めて良かったよ。」

でなければ、あの、感情を押し殺すが、抑え切れずに滲み出た物が仕事着に染み込む。そんな世界に埋もれて、彼女はいないままだった。

「……わたくし、」

「苗字、何になる？」

彼女が何か言いかけるのを、遮って質問した。え、と小さく零す。

キャラメルブラウンをかきあげる薬指に、シンプルな銀がチラチラ反射していた。

「……内緒です。」

「何で。」

彼女は黙った。

「言えよ。」

温かいコーヒーを飲んで顔を火照らせたのか、頬が円く紅い。

「うー……みにやら……です。」

「馬鹿？」

「海野です。」

うみの……海野奈美。

「へえ、海の波になるわけ。」

「笑うのですかっ?」

「笑つかよ。つまらねえ。」

普段より、1.3倍冷たく当たると、彼女は何も言えずにうなだれた。

「……アキラ様。」

私に聞こえている事は分かりきっているだろうと、返事をせずにアップルティーを飲んだ。

これは、いつものより甘い。香の綿菓子 that 口の中でふわっと溶けて広がる。

「正直に告白致しますと、これはチャンスだ、と思いました。」

「うん。」

カン、と軽い音を響かせて、アップルティーをコンクリートの上に置く。

「え、何の事だか、分かりますか?」

「私が世話をしなくて良いと言ったときの事。」

「え。」

彼女が正直な告白をしてきたので、私も便乗した。

「あのさ、あんたは見透かしやすすぎるんだ。」

「えー!?!」

「気付いていなかった?」

「はい。」

真顔で頷く彼女が、どうしても兎に見えた。しかし、寂しいくらいでは死なない、逞しい兎。

「あんたさ、何故あの仕事に就いたわけ。」

「何故……ですか。」

「何故、あんな相性の悪い仕事に就いたわけ。」

クリクリした目を私に預け、口を馬鹿のように半開き、彼女はキョト、とした。

「相性、悪かったですね。長く数をこなして、大分ましになりました。」

たが、ドジをしますし、先輩方にも迷惑をおかけしましたし……。」
「そういうのじゃねえよ。」

私がイラついて、言葉を遮ると、彼女は瞬きを1秒の間に3回した。
「どういの、でしょう?」

「あんな、感情押し殺して餓鬼にペコペコする仕事。」
私は静かに呟いた。

「あんたはもつと、優しい仕事に就けば良い。」

「もう、お仕事はしないと思います。寿退社させて頂いたので。」

「私がクビにした。」

クスクスと彼女は笑う。きっと、兎が笑うとこんな感じなのだろう。

「優しいお仕事ですか。それはつまり、わたくしが優しいということですか。」

私は無視をした。彼女は生意気になった。生意気な兎。

また、二人同時に沈黙して、彼女の空気が吹き返す。

暫くお互い黄昏れていると、彼女は何か意を決したようにコーヒーの残りをガブガブ飲み干した。その途端、急に兎はせかせかとし始める。

「相性、悪いですよ。」

すつこくすつこく。

わたくし、臨機応変が何より苦手です、対応が悪い、なんて、先輩の口癖にさせてしまいましたし、生意気な子供が2人もいましたし、1人は直ぐに家出しましたし、ドジで、洗濯物も一日中浸け置きしていたり、漂白剤の種類を取り違えてしまって、色の着いたお洋服真っ白にしてみましたり、もう7年間、良くクビにされなかったな、なんて、奇跡です。本当に向いていません。パソコンの打てないOLです。釘の打てない大工です。高所恐怖症の窓拭きです。ええ、そうですよつ。」

それだけ一気に早口で言ったのにもかかわらず、彼女は全く息を切らしていなかった。

それどころか、確かに冷たいものを感じた。それは冬が近いせいなどではない。

「それなのに、何故、就いたのか。理由があるに決まっているではないですか。」

彼女は瞳に下手くそな影をかけた。

「7年前、わたくしは雇われました。本心は、10年前すでに就きたいと考えていたのです。しかし、わたくしはまだ高校生でしたから、卒業をする迄、辛抱をせざるをえませんでした。あそこに就くため、わたくしは必死でした。」

彼女は、今、どこを見つめている。その先に、何がある。

「復讐の、ために。」

「あんたの本名は何だ。」

「本田奈美、本名でしたわ。姉は、母の旧姓を名乗っていたのです。」

そうだったのか。だから、今まで気付かなかった。

10年前、兄貴が殴った使用人。奈美はその女の、妹だ。

「両親は幼い頃に離婚しました。わたくし達姉妹は離れ離れになりましたが、わたくしは姉を慕っておりました。」

彼女は精一杯の低い声を出した。

「姉が、仕事先で怪我をした。13の少年に殴り殺されそうになった。」

ぐるんと私の方を向く。

「その報告を受けて、わたくしは復讐しようと誓ったのです。」

冷たい風が容赦なく私の体を劈く。

「で、それはできたの？」

クス。彼女はゆっくりと私の首の近くへと腕を伸ばしてきた。

実際は腕の長さ以上の距離があるのに、顔が目の前にあるような錯覚を起こす。

彼女はそれに気付いたのか、耳元で囁くようにこう言う。

「これから、です。」

視界から彼女の掌が消えた。指が首を掠った。しかし、そのまま首を通り過ぎ、そっと私を抱きしめる。

「ずっと、こうしたかった。」

優しく、彼女らしく、抱きしめられた。

「復讐なんて、しなくても気持ちちは解消できていたのです。だつてとても、美しかったのですから。」

きつと、穏やかな顔をしている。私のうなじら辺にいる彼女の表情。

「美しく汚された、子供でした。」

彼女は私の両腕を両掌で触れ、真っ直ぐ私を見てそう言った。

何故か、彼女は泣きそうな表情を見せた。なのにハッキリとした口調で、今まで出せなかった感情をもろに吐き出す。

「当初は本当に少年が姉を殴ったのか、疑いました。しかし、徐々に、ああ、彼だ。と、確かに感じたのです。そうしなければ、少年は壊れてしまった。ああ、そうか。姉は少年に危害を加えられたのではなく、少年の心のストッパーになったのだ。と、そう感じました。」

彼女は冷静に髪をかきあげ、一呼吸置いた。

「しかし、それも違った。」

りんごジュースが、欲しい。そうしたら私はすっかり、10年前に戻ってしまっただろう。アップルティーなど飲んでしまえば、気分が悪く、時間の経過を体に染み込ませてしまう。

「少年にも、唯一大切なものがあつた。自分ではなく、その大切なものが壊れるのを何より恐れて、殴ったのです。」

そうか。

…… 抽象的すぎるのだ。クソ兄貴。

「この世の中を腐っている、と言う人が腐る程いる所へ、わたくし達は産まれてきたわけですが、仕様がないですよね。」

彼女は沈む夕日を見つめながら言った。

「腐ったものの中にこそ、純粋なものがこっそりと隠れているのですから。……だから、楽しいですよ。宝探しのようで。」 呑気な彼女の言葉に、私が目をつぶると、彼女が、あ、と叫んだ。

「少し、笑った。」

「だから何だ。別に珍しくもないだろう。」

ピョンピョンと跳ねるように笑われたので、不愉快になった。

「アキラ様。」

「うるさい。」

今度はきちんと返事をしてやった。

「わたくし、実はできちゃった結婚なのです。」

腹を押さえて一児の母になる女が言う。

「アキラ、と名付けても宜しいでしょうか。」 私は、あんたに

似た餓鬼なら、こんなに格好良いのは似合わない。とだけ言うておいた。

月 ツキ

もうすぐ、秋が終わろうとしていた。

紅葉も終わり、チラチラと葉が舞い散っていく。

これが、近い内に雪に変わるのだらう。落ちた葉の裏に冬の顔がちらつく度、私は不快感を積み重ねていった。

冬が来る。

秋が、終わる。

私はいつも通り、紅い自転車に乗って登校した。

バイト先のコンビニ前を通り、淡くなった秋の風が私の体に縋り付く。そのようにされても、悪いが私は冬が廻ってくるのを止めてやれない。

「あら、どうも。」

「ああ。」

元樹に会い、適当に挨拶をされたので、私も適当に返事をする。

「あなたの自転車、目立つからすぐに分かるわ。」

最悪だ。目立つ事は望んでいない。これに男が乗っていたら、さらにどれだけ目立つのだらう。兄貴の気が知れない。

「私、赤と見ると、どうしても彼等を思い浮かべてしまうの。」

彼女はそう言って、自分の背後を指差した。

「示されても、見えない。」

「ああ、そうよね。でも……、」

彼女が私の顔をまじまじと見つめる。

今まで私達は真っ直ぐに前を向き、お互い相手の顔をほとんど見ずに会話をしていたものだから、何だか、違和感がある。それに耐え切れず私が、何？と尋ねると、

「あなた、見えないのよね。」

と、しみじみ呟いた。何を言い出すのだ。突然。

「いえ、私は初めてあなたを見た時、てっきり見える人だ、何て思

つていたから。」

「馬鹿？」

彼女は、浅く溜息を吐く。

私は彼女の、全てを静かに受け入れて、全てを容赦なく突き放すような、この溜息が好きだ。

「きつと、あなたが赤い髪をしているからね。」

彼女は自分の黒塗りの髪を弄り、溜息混じりにそう言った。

教室の扉を開ける。

気持ちの悪い空気と、いつもの光景。

「あのね、あのね、こんど、だいがくせいひとと、あそぶのお。」

扉の前で、うつとうしい小動物が、その他と話していた。

「いいな。でもあんたカレシ出来たでしょう。いいの？」

「いいのお。だって、いまのカレシにあきたあと、かわりのひとがすぐにいないと、さみしいでしょ？」

そのような会話が、聞きたくなくても聞こえた。

「邪魔。」

こういう時に、元樹の溜息が使えたらどんなに良いのだろう。

「こわいよお。」

私の一言で、すつ、と退いていく。

なるほど、もっと早くに胸ぐらを掴んでおけば良かった。これでやっと、窓から景色がゆつくりと眺められる。

そんな日の放課後に、珍しく元樹が話し掛けてきた。私が小動物から解放されたためだろう。

「一ヶ月前に、コージさんが帰って来たらしいわね。」

「ああ。」

「兄さんに聞いたわ。一ヶ月前にだけねど。」

「それより、何故あのクソ兄貴と彼は友人なんてしているんだ。」

「コージさんが人に興味がないからよ。」

彼女はこれ以外の答えはないように、スッパリと言った。

恐らく、彼に直接聞いたわけではないだろうが、なるほど。確かにそれ以外に答えはない。全て、納得できた。

「それで、何か用？」

「……放課後、気が向いたら屋上に来なさいよ。」

そう言い残し、彼女は教室から出て行った。

私はまた、窓の外を見る。

冬は、嫌いだ。

昼間だというのに、月が出ている。

元樹が見ている幽霊は、もしかしたらこのように見えるのかもしれない。

本来ここにいるべき存在ではないのに、ここにいる。だけれど遠く、触れられない。絶対的な距離。

そのやるせなさは、何度、彼女の頬を掠めたのだろうか。

きつとそれは、そつ、と近づき、血と一緒に体中を流れていく。

彼女はそれに慣れただろうか。だからきつと、あの溜息が吐けるのだ。

ねえ、月。お前はこの世に必要なものなど、あると思うか。

もしもないなどと綺麗事を言うのなら、お前は何故そこにいる。

何故、ここにいると言うの。

ねえ、月。答えられるか。答えてくれ。

分かっているさ。私の事は自分が一番良く分かっている。でも、

あと少し、待っていて。今日はまだ、気が向かないのだ。

バイトは10時00分を過ぎた。

いつも通り慣れてきた仕事をこなす。

私は毎日、真面目に夜中までバイトをみっちりいれて働いてきたので、大分金は貯まっていた。

禿げた身長の高い親父がニヤニヤしながらエロ本を買って行き、チャラついた、格好だけの男がメールアドレスを聞いてきた頃だ。私が、よし、バイトを辞めよう、と思ったのは。

私は無事、そのナンパ男を殴り、バイトを辞める事が出来た。

疲れた体でゆらゆら自転車をこぐ。

ライトが真っ直ぐ行く道を照らしてくれない。ああ、照らさないでくれ。このままずっと。

誰にも照らされたくない。兄貴にだって、元樹にだって、奈美にだって、あの、満月に近い月にすらだ。

ああ、そろそろだ。ゼンマイをあと、一巻きだけだ。たった、一巻き。それで、私は……。

月と目が合った。何だその目は。絵本の挿絵のような柔らかな瞳は。私を見下ろすな。私を照らすな。

私の道は自分が決める。このゼンマイは自分が巻く。例え、手から血が出ようと、指が折れようと。

だから、照らすな。その瞳で私を見るな。地球の重力に負けたくせに。太陽がなければ、輝けなくせに。

私はペダルをこいだ。

今から行けば明け方になるだろう。だが、そんなこと、今の私には関係ない。

足を限界まで押し出し、こいだ。風を感じる。秋と冬を感じる。

ああ、そうさ。認めるよ。私は冬が来る事に対して焦っていた。

冬が来るまでに何とかしなければ、きつとまた、流されて行くばかりだっただろう。しかし、明け方には、明日には……。

『おじやましまあす。なあ、外に停めてある自転車、俺のだろう。懐かしいなあ。何、お前使ってんの？』

『だったら、何だ。』

『別に。奈美ちゃん、アップルティー。』

『奈美なら辞めた。』

『へえ、何でだよ。』

『何で、お前に教える義務があるってんだ。』

『お前が追い出したってか。酷い子っ！』

『じゃあ、明理さんに会って来よう。』

『……。』

『部屋は変わってないよなあ？』

彼は明里の部屋の封印を解く。

良くこの部屋を出入りしていたのは、彼が出て行く前の事で、必ず、彼を先に入れた。

彼が出て行ってから興味をなくし、全くここに入る事はなくなつた。

『ふうん。ちゃんと綺麗にしてあるんだな。』

久々に明里の顔を見た。あの時から何一つとして変わらない笑顔。しかし、紙きれに心はない。

『こうして見ると、本当にアキラに似ているよな。アキラを笑わせた感じ。』

ふざけんな。

『線香の、匂いがする。』

……。

『毎晩、磨いて、線香焚いて、手を合わせて、アキラとコージを見守ってやってくれ。なんて言っているだろうな。』

……。

『メイドに任せりや良いのに。罪滅ぼしのつもりかな。葬式に来なかった事を明里さんが恨んでいないなんて、俺にも分かるぜ。』
全くだ。

『母さんは、幸せだった。』

クソ兄貴にクソ親父、

『私だつて知っているさ、それくらい。』

そして、二十歳という若さで死んだ馬鹿女が、私の家族。

『だよな。俺達の親になれたんだ。光栄な事だぜ。』

朝日が顔を出す前の、空が明るむ頃、月は淡くなった。

私は筋肉痛でピシピシする足を引きずり、あの砂浜を歩く。海と向かい合わせになると、別荘が後ろにある、あの砂浜。

息が上がったままで、喉の奥が熱い。その場で倒れるようにして仰向けになった。

頭の上まで潮の跡がある。どうやらここまで満ちていたようだ。背中が湿ってきたので、横を向く。

砂と同じ目線になり、私は遠くに何かを見つけた。貝殻か何かと思ったが、あんな色をしたものは滅多にないだろう。もしもあつたなら、着色料を作れるのではないか。まあ、貝殻では無理でしょうが。

だとしたら、あれしかない。あの、ドキツい……。

私は体を起こし、それに近付いた。貝殻より一回り大きい程度を残し、埋まっており、しかし、固さは貝殻より遥かに柔らかい。

私は紅いマニキュアを塗った指でそれを掘り出した。

あの、不可解な財布。

母の、形見だ。

母は若かった。若く、美しく、そして儚かった。

母は幸せ者だった。

彼女は金持ちの家の一人娘で、生まれたときから美貌と地位と膨大な金を持ち合わせていた。

20年間、思い通りにならなかった事はない。親の権利を使い、私達の親父とも結ばれた。

しかしそれは戸籍上でのみだ。

父には、そのために引き離された恋人がいた。良くある話だ。

2人の絆は、唯一、母にはどうしようも出来ないものだった。

しかし、母が生まれてから死ぬまでの20年間、思いのままだったのは事実なのだ。

「ママはね、思い通りにならなかった事はないの。」

これは、今は仏壇のある部屋の中の思い出。

「でもね、今度はなかなか難しかったわ。お父さんの力を使っても、やっぱり完璧には無理だったみたい。」

母は最高の笑顔で明るく私達に語りかけた。

「でもね、」

兄貴は母と私が似ていると言うが、兄貴もそっくりなのだ。

使用人の寮に火を付けた時の、あの悪戯な兄貴の笑顔。それを見た時、あ、お母さんだ。と、思ったのを覚えている。

「良い事を思い付いちゃった。」

「なあに？」

幼い兄貴が尋ねた。

「ママはね、思い通りにならなかった事はないの。」

その時、彼女の目は白をなくし、半月型の闇になった。

「私が今死ねば、これから思い通りにならない事なんて、ないんだわ。」

キャハハと、高い声で笑う。

母親は懷から銃を取り出した。手首をきつたり、首を吊るなどの生温いやり方、彼女には似合わない。

兄貴が銃を見て、格好良いと喜んでいる。

パン。

銃声はドラマや映画でやる程大きくはない。そう感じたただけだろうが、それが私の感想だ。

弱い母親。

晴 ハレ

私は思い出から我に返り、朝日が出ている事に気が付いた。

今日は、晴れるだろう。

秋晴れだ。

目標は朝日。宣言通り、投げ付けてやる。何度でもだ。母の形見のこの財布は、海に沈むのがお似合いだ。

私は力一杯、財布を投げた。

音に気付き、別荘の方へと振り向いた。あんたも来ていたか。

目的を果たした私はもう一つの目的場所まで自転車をこぎ進める。今度はゆっくりなので、2倍近く時間がかかるだろう。着く頃には夜か。

また月が顔を出して、私を追いかける。

ああ、知っている。お前はいつでも私の傍にいた。離れた事などなかった。ずっと、見守っていたのだろう。星ではなく、月になって。

ああ、悔しいなあ。そんなお前が鬱陶しいよ。

私は自転車を放り出して、最後の気力を振り絞り、階段を一気に駆け登った。熱い血が全身を駆け巡る。

月が、私を引っ張らない。私を照らさない。私が、月を引っ張っているのだ。

錆れた扉を開けた。

一番高いそこは、一番空に近い。星が瞬く。月が光を放つ。星の周りには更に細かな光の粒が散って、瞬きをする度に星が増えている。

もしもあれが、黒いビニールに穴を開けたものだとしたら、穴の向こうでは誰が夜を覗いている。

「気が向いた。」

私はまだ荒い息でそう言った。

「あら、そう。」

闇に溶け込んで、まだ制服の元樹は応えた。昨日は一体、何時迄ここにいたのだろう。

「あらそう、また今日も、来ないかと思ったわ。」

「じゃあ、何故まだいる。」

風が彼女の美しい髪を撫で、うつとりとしていた。

「来ると思ったからよ。」

雲が月を隠して、闇が深くなる。闇は、彼女に似合い過ぎる。ただでさえ美しい彼女を、更に美しくする。

「出来ればずっと来ない方が良かったのに……。」

また、風が吹いた。秋と冬の間の風。寂しさがほんのり含まれていて、これが少しずつ色濃くなり、木々から色を奪う風になる。

「これが、最後になるのでしょうかね。」

彼女は呟いた。

「行くな、と言ったら、あなたは行くのを止めるかしら。」

「さあね。きつと、あんたが言った逆の事をする。」

「嘘だわ。」

私の一言が、気に入らなかったのか、彼女の声は低くなった。

「誰が行くかと止めても、何があなたに行けと背中を押しても、あなたを動かすのはあなたでしかないのでしょうか。」

それだけ言うと、彼女は星に向かって溜息を吐いた。

「一度しか言わないけれど、出来る限り聞き逃して頂戴。」

雲が流れて、月が顔を出す。彼女の姿が明るくなる。

行かないでよ……。

…… ああ、前言撤回をする。

これ以上に美しい彼女を見た事がない。月に照らされた彼女は、あまりにも幻想的だ。美しく、髪の本一本まで描かれた繊細な、一枚の絵のようだ。

「何故？」

「何故って、そう聞いたの？」

彼女は私の方を静かに向いた。

「あなたと違って、私はこの世界にピタリとくるものがあつたらよ。」

いつも闇色をした彼女の瞳が、黒真珠のように光った。

いつもの廊下を、土足で歩く。

私は気配とも呼べぬ何かを感じ、後ろを振り返った。

いつもの廊下。しかし、帰りの廊下をこの方向から見た事は、確かにない。

成る程な……。

成る程、こんな事か。こんなに……こんな簡単な攻略方だったのか。

「ははは。」

私は笑った。そして……。

「……………」

……………なんだ……、これは。

ほろり、と、何かが私の頬に触れる。ああ、落ち葉か。いや、違う。色のない、形のない、何か。

一滴だけ、許してくれ、自分。

視界のぼやけた中に、私がいた。何にも囚われない、誰にも、負けない、強く、しなやかで、凜とした……。

ばいばい、地球。

私は私の月に行く。

晴 ハレ （後書き）

この小説は、私が感覚的に書いたものです。
読み始めの主人公と、読み終わりの主人公。

どこが変わったのか、ハッキリとした言葉では現せられないが、
何かが変わった。

そんな小説を書きたくて出来た作品。

この作品で、誰かに何かを伝えたい。という事は、ありません。
ただ、これを通して、純粹でがむしゃらに生きている彼女等と関
わってほしい。そう思います。

最後になりましたが、アキ晴レを、更にこんな細かい所まで読ん
でいただき、深く感謝します。

次回作をお待ち下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8737a/>

アキ晴レ

2011年1月16日05時21分発行